

## 感情特性と情動への評価の関連性について

The Relationship between the Evaluation of Emotion and the Emotional Traits

藤井昌志\*・谷口麻起子

Fujii Masashi and Taniguchi Makiko

### 要 約

本研究は、特定の感情経験のもちやすさである「感情特性」と、自己が経験した情動に対する肯定・否定の価値づけである「情動への評価」との関連を検討したものである。一般大学生115名を対象に、感情特性尺度と情動への評価尺度を実施した。その結果、まず情動への評価は「喜び」因子については天井効果・フロア効果がみられたため、分析を断念した。また感情特性をもとに調査対象者をグループ分けしたところ、ポジティブ感情については違いがなく、ネガティブ感情と敵意感情をより感じやすい「ネガティブ特性群」と、より感じにくい「ポジティブ特性群」の2つに分かれた。この2つの特性群で感情への評価を比較したところ、「悲しみ」の他者懸念因子のみネガティブ特性群が高かったが、それ以外に有意差は認められなかった。情動への評価は特性によってあまり影響を受けないが、「悲しみ」については特性によって異なるため、特殊な感情であることが推測された。

**Key Words** : 感情特性, 情動への評価, 心理療法

### 1. 問題と目的

情動<sup>註1)</sup>とは、心理学では一過性に生じる強い感情のことと定義されている。情動には様々な役割がある。例えば情動という生物学的システムは、健康状態を作り出し、健康を維持する中心的な役割を果たしていると考えられる(余語, 2007)。他に感情は認知, 記憶, 身体といった人間の様々な心のメカニズムと深い関連があることがわかっている。中でも近年注目されているのは、情動が適応に役立つという機能的な側面である(奥村, 2008)。情動は、自己や他者に自分について知らせる信号機能としての役割があり(Campos, Campos, & Barett, 1989), その後の意志決定を導くことによって(Damasio, 1994), 適応につながっていくということが指摘されている。例えば悲しみは重要な対象を喪失した際に経験される情動であり, そのような状況を自分や他者に伝達する信号として働くことで, 自己に対しては活動を抑止してそれ以上の消耗を防ぐ役割を, 他者に対しては養護や共感を引き出すという役割を持っている(Malatesta & Wilson, 1988)。

心理療法の場面でも、情動は適応のために重要な役割を果たしていると考えられる。Jung CG (1934)は「感情に色づけられた心的複合体」としての「コンプレックス」の考え方を提唱した。

\*藤井昌志：聖泉大学卒業生

コンプレックスとは意識的な統制に服さない、無意識的な心的過程で働く心的内容の集合のことであり、これによって様々な問題や症状が起こることがある。そこでコンプレックスの内容を自我に統合することが心理療法の目的の1つとされる。つまり感情はその人のたましいの問題をセラピストとクライアントに知らせ、またたましいが訴える問題を理解する鍵となると言えよう。逆に感情の認識・表出が困難といった特徴をもつアレキシサイミアが、ストレス反応の悪化や問題の先延ばしにつながりやすい(櫻村・福森, 2010)ことを考えると、感情とは臨床心理学においても重要な概念であると言える。感情の研究については特に生理心理学, 感情心理学, 認知心理学の分野が中心となっているが、本研究ではそれらの先行研究をベースにしながら、臨床心理学的な視点で感情について考えたい。

本研究では情動研究の中でも「感情特性」と「情動への評価」の2つを取り上げる。「感情特性」とは、特定の感情経験の頻度あるいは特定の感情反応の閾値の低さという観点から捉えられる、時間的に安定かつ一貫した個人の傾向または特性のことを指す(Watson D & Clark LA, 1994)。例えば困難な状況に置かれた時ある人は悲しみを感じ、ある人は怒りを感じる。このように同じ状況においてどのような情動を感じるかは、感情特性によっていると考えられている。また特定の感情の発生は感情特性に依存するため、感情特性によって感情経験に個人差が生じたり(伊藤, 2000)、感情の認知的評価に影響を与えたりすると言われている(坂上, 1999)。

また「情動への評価」とは自己が経験した情動に対する、肯定・否定の価値づけを伴う評価のことを指す(奥村, 2010)。情動の評価は一回性のもののみならず、ある程度固定化された特性的な性質を持つものと考えられている(奥村, 2008)。例えば悲しみは一般的にはネガティブなものとして解釈されやすいが、悲しみを乗り越えて成長することに価値をおいていけばポジティブなものとして評価する人もいるだろう。このように情動に対してどのような評価をするかにも、個人差があると考えられている。情動への否定的評価は、アレキシサイミアの下位要素である情動認識困難と言語化困難と正の関連を持つというように、情動への評価は情動の表出過程と関連があると言われている(奥村, 2008)。また情動への評価は発達過程において、養育者から自分の情動に対してどのような反応を得てきたかが重要な意味を持つことがわかっている(坂上・菅沼, 2001)。

これら感情特性と情動への評価を本研究で取り上げる理由は、これらの概念が臨床的に意義のあるものと考えられることである。感情特性は言わば特定の感情への近さ・感じやすさと言い換えることができ、先に挙げたJungのコンプレックスの概念に近いものがあると考えられる。つまりいかなる感情特性を持っているかということは、いかなるコンプレックスにその人が動かされているかということに通じると推測されるのである。また情動への評価は自分がもっている情動に対する構え、自身のこころへの態度と言い換えることができる。心理療法では自らの情動を受け容れられるよう、セラピストがクライアントの情動を受け容れるという作業を行っていくため、そもそもクライアントが自分の情動に対してどのような評価をしているかを理解することは大切な点と言える。

ところで感情特性と情動への評価は、上記にみたように臨床上関連があると考えられ、また両者ともパーソナリティにおける感情の役割を示すものとして、密接な関係があると推測される。例えば日頃から怒りを感じやすいという感情特性を持つ人は怒りに対して親近感があるため、怒りという情動の評価が肯定的であると推測される。しかし逆に怒りを感じやすいということは怒りとして表現されるコンプレックスに囚われていると考えられるため、怒りという情動に対して否定的という場合もあろう。このように推測の範囲では感情特性と情動への評価の関連は、1対1対応のクリアなものではないと考えられるが、このことを検討した先行研究は見当たらない。またこれらの関係を明らかにすることは、ある感情特性を持つ人が感情的な表現を行った時、その感情に対してその人がどのような評価をしているのかの見当をつけられるという点で、臨床上意義がある。例えば怒りの感情特性を持つ人が怒りを肯定的に評価するという結果が得られたならば、極めて激しい怒りをクライアントが表現した時に、セラピストが怒りをネガティブなものであると一般的な解釈を行ってネガティブなものを受け止めてしまうことは、筋違いとなろう。心理臨床では出会うクライアント、その時の表現と状況、セラピストの感じたことによって感情を理解していくが、一般的な傾向として感情特性と情動への評価の関連性を知っておくことは、意味のあることと考えられる。

ところで感情研究には様々な研究手法があるが、本研究では最もオーソドックスで、かつ先行研究でもよく使用されている質問紙法によって調査を行うこととした。また本研究では臨床での応用を念頭に置きつつも、まずは一般的な傾向から抑えていくことが必要であると考え、一般大学生を協力者とした。

以上のことから本研究では、感情特性と感情評価との間にどのような関連性があるのかを、質問紙法によって検討することを目的とした。

## 2. 方法

### 2.1 調査協力者

調査協力者は心理学系授業を受講していた関西圏私立大学の学生115名(男性34名,女性81名)であった。

### 2.2 質問紙

#### (1) 感情特性の測定

Izard et al (1993) の個別感情尺度第4版 (DES-IV: Discrete Emotion Scale- IV) を坂上 (1999) が翻訳したものを使用した。なお、坂上の翻訳は一部であったため、残りの翻訳を筆者らで行った。この尺度は「興味」「喜び」「驚き」などの12の個別感情について、普段どのくらいの頻度で経験するかを5件法で尋ねる、計36項目(各感情につき3項目)からなる質問紙である。

#### (2) 情動への評価

情動への評価傾向を測定するために、「情動への評価尺度」(奥村, 2008)を使用した。この

尺度は悲しみ・怒り・喜びの3情動についての検討を目的に作成されたが、喜びの項目については高割合で天井効果・フロア効果が認められたため、調査が断念されている。そこで本研究ではあらためて喜びの項目についての調査を試みた。質問項目は各情動につき22項目、計66項目であり、6件法で評定するものである。

質問紙は本研究についての説明と参加同意書、性別と年齢・所属についての質問、(1)～(2)の尺度を1セットとし、「感情への評価についての調査」とした。またカウンターバランスのため、質問紙は4パターン作成した。

## 2.3 手続き

私立大学の心理学系授業において、筆者の1人である藤井から調査についての説明を行い、参加同意書への回答を求めた。参加に同意する者には署名を求め、回収後は参加同意書を切り離し、調査終了後にシュレッダー処理するため、プライバシーが守られることを説明した。質問紙はその場で実施し、筆者らが回収を行った。

## 3. 結果

2.3の手続きにより、151名の回答を得ることができた。そのうち欠損値を含んだ36名分を除外した、115名(男性34名、女性81名)の回答を分析に用いた。

### 3.1 因子分析

#### 3.1.1 感情特性の因子分析

感情特性尺度の因子構造の検討を行うため、因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。感情特性尺度は12の感情それぞれが3項目からなるため、個々の感情について3つの平均値を用いた。また因子数は先行研究(加藤・加藤・杉村ら, 2008)に倣って3因子に指定し、因子負荷量が±.50以上の項目から因子を分類した。結果を表1に示す。

第1因子は「罪悪」「恥」「はにかみ」「恐怖」「自分への反感」の5項目の感情から構成されていたことから、「ネガティブ感情」因子と命名した。第2因子は「嫌悪」「軽蔑」「悲しみ」「怒り」の4種類の感情から構成されていたので、「敵意感情」因子と命名した。第3因子は「喜び」「驚き」「興味」の3種類の感情から構成されていたので、「ポジティブ感情」因子とした。 $\alpha$ 係数はそれぞれ.91, .81, .82であり、十分な内的整合性があったと判断された。

また因子間相関については、「ネガティブ感情」と「敵意感情」との間に0.65という比較的強い正の相関がみられた。それ以外の因子間相関は-0.13, -0.09とあるように、ほとんど相関はなかった。

#### 3.1.2 情動への評価の因子分析

続いて情動への評価尺度の因子分析を行った。まず、平均値および標準偏差を算出し、天井効果・

表1 「感情特性」尺度（個別情動尺度－IV）の因子分析結果  
（バリマックス回転後の因子パターン）

因子名・感情特性の項目	因子1	因子2	因子3	共通性
<b>ネガティブ感情 (<math>\alpha=0.91</math>)</b>				
・ 罪悪	<b>-0.83</b>	-0.33	0.07	0.80
・ 恥	<b>-0.75</b>	-0.32	0.12	0.67
・ はにかみ	<b>-0.70</b>	-0.08	-0.02	0.50
・ 恐怖	<b>-0.67</b>	-0.45	0.06	0.65
・ 自分への反感	<b>-0.66</b>	-0.41	0.07	0.60
<b>敵意感情 (<math>\alpha=0.81</math>)</b>				
・ 嫌悪	-0.38	<b>-0.65</b>	-0.07	0.57
・ 軽蔑	-0.10	<b>-0.65</b>	-0.05	0.43
・ 悲しみ	-0.40	<b>-0.64</b>	0.16	0.60
・ 怒り	-0.34	<b>-0.62</b>	0.08	0.50
<b>ポジティブ感情 (<math>\alpha=0.82</math>)</b>				
・ 喜び	0.19	0.10	<b>-0.83</b>	0.74
・ 驚き	0.01	-0.12	<b>-0.78</b>	0.62
・ 興味	-0.04	0.08	<b>-0.71</b>	0.52
寄与率(%)	25.63	18.77	15.70	
因子間相関	因子1	因子2	因子3	
	因子1	0.65	-0.13	
	因子2		-0.09	

注：太字は因子負荷量が±0.50であることを表す。

フロア効果を検討したところ、喜びの評価尺度については否定的評価項目にフロア効果が、肯定的評価項目に天井効果がみられたため、分析を断念した。この結果については先行研究（奥村, 2008）と同様であった。

そこで「怒りへの評価」、「悲しみへの評価」についての因子分析を進めた。先行研究（奥村, 2008）に倣って3因子に指定し、負荷量が±.40に満たない項目や複数の因子に高い負荷量を示した項目は除外し、再度因子分析を行った（バリマックス回転）。その結果を表2・3に示す。

「怒りへの評価」の第1因子は10項目あり、「怒りを感じることは厄介なことだと思う」や「怒りを感じることに對して、きつと感じる」などが含まれていたことから「嫌悪感」因子と命名した。第2因子は7項目あり、「怒りを感じるのは、いいことだ」や「怒りを感じることは必要だ」などがあったことから「必要性」因子とし、第3因子は「怒りを感じるのは、心の弱さであると思う」、「怒りを感じるのは、悪いことだと思う」などの3項目であったことから「不純感」因子とした。 $\alpha$ 係数はそれぞれ.89, .86, .83と十分な内的整合性が得られた。

また因子間相関については、「嫌悪感」と「不純感」との間に0.42という比較的強い正の相関が、「必要性」と「不純感」との間に-0.41という比較的強い負の相関がみられた。しかし「嫌悪感」と「不純感」との間は-0.06と、ほとんど相関はみられなかった。

表2 「情動への評価」尺度（怒り）の因子分析結果  
(バリマックス回転後の因子パターン)

因子名・怒りへの評価の項目	因子1	因子2	因子3	共通性
<b>嫌悪感 (<math>\alpha=0.89</math>)</b>				
・ 怒りを感じるのは厄介なことだと思う	<b>0.76</b>	-0.12	0.01	0.59
・ 怒りを感じることに對して、きつと感じる	<b>0.75</b>	-0.11	-0.04	0.57
・ 怒りを感じることに對して、いやだと思ふ	<b>0.70</b>	-0.22	0.02	0.55
・ 怒りを感じるのは面倒なことだと思ふ	<b>0.68</b>	-0.05	-0.17	0.50
・ 怒りを感じることに對して、疲れると感じる	<b>0.66</b>	0.07	0.00	0.44
・ 怒りを感じることに對して、みっともないと思ふことがある	<b>0.64</b>	0.05	-0.13	0.43
・ 怒りを感じることに罪悪感を感じる	<b>0.63</b>	0.15	-0.26	0.49
・ 怒りを感じるのが嫌いだ	<b>0.62</b>	-0.14	-0.19	0.44
・ 怒りを感じることに對して、恥ずかしいと思ふことがある	<b>0.61</b>	0.06	-0.27	0.45
・ 怒りを感じることに申し訳ないと感ずることがある	<b>0.57</b>	0.13	-0.17	0.37
<b>必要性 (<math>\alpha=0.86</math>)</b>				
・ 怒りを感じるのは、いいことだ	-0.05	<b>0.81</b>	0.27	0.73
・ 怒りを感じるのは、あつたほうがいいと思ふ	0.02	<b>0.76</b>	0.22	0.62
・ 怒りを感じることは必要だ	0.07	<b>0.69</b>	0.31	0.58
・ 怒りを感じるのは、なくてはならないことだ	0.21	<b>0.67</b>	0.21	0.54
・ 怒りを感じるのはプラスになる	-0.17	<b>0.60</b>	-0.07	0.39
・ 怒りを感じるのは役に立つ	-0.18	<b>0.58</b>	-0.08	0.38
・ 怒りを感じるのは、あつてもいいと思ふ	0.13	<b>0.50</b>	0.37	0.40
<b>不純感 (<math>\alpha=0.83</math>)</b>				
・ 怒りを感じるのは、心の弱さであると思ふ	0.33	-0.20	<b>-0.67</b>	0.60
・ 怒りを感じるのは、悪いことだと思ふ	0.21	-0.28	<b>-0.67</b>	0.57
・ 怒りを感じるのは、立派でないと思ふ	0.31	-0.22	<b>-0.65</b>	0.56
寄与率(%)	24.07	17.06	9.90	
因子間相関	因子1	因子2	因子3	
	因子1	-0.06	0.42	
	因子2		-0.41	

註：太字は因子負荷量が $\pm 0.40$ であることを表す。

表3 「情動への評価」尺度（悲しみ）の因子分析結果  
（バリマックス回転後の因子パターン）

因子名・悲しみへの評価の項目	因子1	因子2	因子3	共通性
<b>他者懸念 (<math>\alpha=0.89</math>)</b>				
・悲しみを感じることに對して、みっともないと思うことがある	<b>-0.81</b>	0.11	0.16	0.69
・悲しみを感じるのは情けないと思うことがある	<b>-0.79</b>	0.17	0.22	0.70
・悲しみを感じることに對して、恥ずかしいと思うことがある	<b>-0.74</b>	0.07	0.25	0.62
・悲しみを感じることに罪悪感を感じる	<b>-0.72</b>	0.12	0.21	0.58
・悲しみを感じるのは、心の弱さであると思う	<b>-0.63</b>	0.18	0.20	0.47
・悲しみを感じることに申し訳ないと感じることがある	<b>-0.63</b>	0.05	0.29	0.48
・悲しみを感じるのは、悪いことだと思う	<b>-0.52</b>	0.32	0.18	0.41
・悲しみを感じるのは、立派でないと思う	<b>-0.41</b>	0.34	0.20	0.32
<b>必要性 (<math>\alpha=0.90</math>)</b>				
・悲しみを感じるのはプラスになる	-0.04	<b>-0.80</b>	-0.04	0.64
・悲しみを感じるのは、あったほうが良いと思う	0.14	<b>-0.78</b>	0.08	0.63
・悲しみを感じるのは役に立つ	0.10	<b>-0.74</b>	-0.04	0.56
・悲しみを感じるのは、あってもいいと思う	0.16	<b>-0.73</b>	0.15	0.58
・悲しみを感じるのは、いいことだ	0.07	<b>-0.73</b>	-0.18	0.56
・悲しみを感じるのは、なくてはならないことだ	0.32	<b>-0.70</b>	0.24	0.66
・悲しみを感じることは必要だ	0.33	<b>-0.68</b>	0.29	0.66
<b>負担感 (<math>\alpha=0.86</math>)</b>				
・悲しみを感じるのが嫌いだ	-0.22	0.06	<b>0.74</b>	0.61
・悲しみを感じることに對して、きついと感じる	-0.23	-0.05	<b>0.71</b>	0.56
・悲しみを感じるのは面倒なことだと思う	-0.18	-0.11	<b>0.68</b>	0.50
・悲しみを感じるのは厄介なことだと思う	-0.36	0.04	<b>0.66</b>	0.57
・悲しみを感じることに對して、疲れると感じる	-0.35	-0.20	<b>0.66</b>	0.59
寄与率(%)	21.20	20.98	14.88	
因子間相関	因子1	因子2	因子3	
	因子1	-0.34	0.50	
	因子2		0.06	

註：太字は因子負荷量が±0.40であることを表す。

「悲しみへの評価」については先行研究（奥村，2008）とほぼ同一の結果となったため，先行研究に倣って命名した。第1因子は「悲しみを覚えることに対して，みっともないと思うことがある」，「悲しみを覚えるのは情けないと思うことがある」などの8項目であり，「他者懸念」因子とした。第2因子は「悲しみを覚えることはプラスになる」，「悲しみを覚えるのは，あった方がいいと思う」などの7項目からなり，「必要性」因子とした。第3因子は「悲しみを覚えるのが嫌いだ」，「悲しみを覚えることに対して，きつくと覚える」などの5項目から成っており，「負担感」因子と命名した。 $\alpha$  奇数については .89, .90, .86と十分な内的整合性が得られた。

因子間相関については，「他者懸念」と「必要性」の間に -0.34という比較的弱い負の相関が，「他者懸念」と「負担感」の間に0.50という比較的強い正の相関がみられた。「必要性」と「負担感」の間は0.06で，ほとんど相関はみられなかった。

### 3.2 クラスタ分析

感情特性によって調査協力者の分類を行った。感情特性尺度の「ネガティブ感情」「敵意感情」「ポジティブ感情」の3因子の因子得点を用いて，クラスタ分析を行った。クラスタ分析は，最も明確なクラスタを作るウォード法を用いた。得られたデンドログラムから100付近に閾値を定めて，調査協力者を2つの群に分けた。各群の人数はクラスタAが51名（男性13名，女性38名），クラスタBが64名（男性21名，女性43名）であった。次にこれら2つクラスタの感情特性を検討するために，各クラスタで因子得点の平均を求めた（表4）。「ネガティブ感情」因子についてクラスタAは33.10，クラスタBは51.14，「敵意感情」はクラスタAで28.00，クラスタBで36.97と，共にクラスタBの得点の方が高かった。また「ポジティブ感情」因子についてはクラスタAで28.94，クラスタBで28.09と，大きな差はみられなかった。そこで分散分析を行ったところ，「ネガティブ感情」（ $F=198.18, p<.001$ ）と「敵意感情」（ $F=54.78, p<.001$ ）で有意差があった。「ポジティブ感情」では有意差は見られなかった（ $F=0.53, n.s.$ ）。これらのことからクラスタAの群はクラスタBの群に比べ，ネガティブ感情と敵意感情が弱い，つまり物事をあまりネガティブに考えない群であると考えられる。そこでクラスタAの群を「ポジティブ特性群」，クラスタBの群を「ネガティブ特性群」と命名した。

表4 感情特性による2つのクラスタの因子得点平均と標準偏差

因子名	クラスタ	クラスタA	クラスタB	F値
ネガティブ感情	平均	33.10	51.14	198.18**
	標準偏差	6.09	7.26	
敵意感情	平均	28.00	36.97	54.78**
	標準偏差	6.85	6.01	
ポジティブ感情	平均	28.94	28.09	0.53
	標準偏差	6.95	5.44	

注) \*\*<.001



### 3.3 情動への評価の群別比較

次に、感情特性の違いによって情動への評価にどのような違いがあるのかを検討した。3.2のクラスター分析によって分かれた感情特性ポジティブ群とネガティブ群ごとに、情動への評価質問紙でみられた怒り、悲しみへの評価因子得点の平均を求めた。結果を図1・2に示す。怒りへの評価と、悲しみへの評価の「必要性」因子は情動に対する肯定的評価であるため、得点が大きければ大きいほど評価が高く肯定的であるといえる。それに対し、怒りへの評価の「嫌悪感」と「不純感」、悲しみへの評価の「他者懸念」と「負担感」は否定的評価であるため、得点が大きければ大きいほど、評価が低く否定的であると言える。

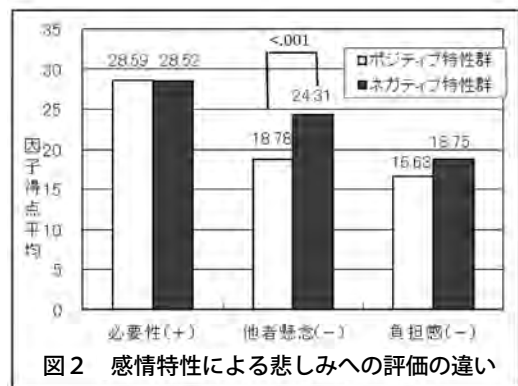
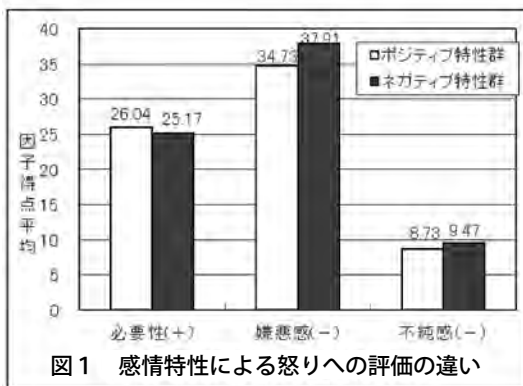
まず怒りへの評価についてであるが、必要性因子についてはポジティブ特性群で26.04、ネガティブ特性群で25.17と、ややポジティブ特性群が高かった。また嫌悪感因子についてはポジティブ特性群で34.73、ネガティブ特性群で37.91と、ネガティブ特性群の方が高かった。最後に不純感因子についてはポジティブ特性群で8.73、ネガティブ特性群で9.47と、やはりネガティブ特性群の方が高かった。しかしながら分散分析を行ったところ、全て有意差はみられなかった(それぞれ  $F(1,113) = 2.55, 0.72, 0.03, ns$ )。

次に悲しみへの評価についてみると、必要性因子についてはポジティブ特性群で28.59、ネガティブ特性群で28.52とほとんど差がなかった。他者懸念因子についてはポジティブ特性群18.78、ネガティブ特性群24.31でネガティブ特性群の方が高かった。また負担感因子についても、ポジティブ特性群16.63、ネガティブ特性群18.75と、ネガティブ特性群の方が得点は高かった。分散分析の結果、悲しみへの評価の「他者懸念」のみ、特性群間間で有意差があることがわかった ( $F=13.13, p<.001$ )。

## 4. 考察

### 4.1 感情特性の因子分析について

本研究では感情特性尺度を用い、特性によるクラスター分けを試みた。まず感情特性尺度の因子分析を行ったところ、ネガティブ感情因子と敵意感情因子には比較的強い正の相関がみられ、



ポジティブ感情についての相関はみられなかった。また感情特性の因子得点を用いたクラスター分けの分析でも、2つのクラスターにおいてポジティブ感情では有意差がなく、一方のクラスターが他方のクラスターよりもネガティブ感情、敵意感情を感じやすいという結果が得られた。これらの結果からネガティブな感情を日頃感じやすい人は敵意感情についても感じやすく、ポジティブな感情はネガティブな感情特性とは独立した要素があると考えられる。臨床上ではうつ病や摂食障害の方々には自己否定感が強く、ものごとを否定的に捉えていく様子がうかがえるが、本研究の結果は一般の方にとっても、否定的な感情が否定的な感情を体験させる、つまり負のスパイラルに陥っていく可能性があることが示されたといえよう。逆にポジティブ感情がネガティブ／敵意感情と負の相関すらみられなかったことから、否定的な感情を体験しやすい人であっても、ポジティブな感情を独立して感じることもあると考えられる。このことは、認知行動療法において否定的なものの見方を肯定的なものの見方へと変換させていく際、セラピストから肯定的なものの見方を教えるのではなく、クライアント自ら体験している肯定的な感情を生かし、育てていくというクライアントの主体的なセラピーができる可能性を示唆するものといえよう。

#### 4.2 情動への評価の因子分析について

本研究では先行研究（奥田，2008）をもとに、情動への評価傾向を測定するための「情動への評価尺度」を使用した。先行研究と同様に、「喜び」への評価尺度について否定的評価についてはフロア評価、肯定的評価については天井効果がみられた。この理由としては奥田（2008）でも考えられていた通り、ネガティブ感情とポジティブ感情とではその性質が異なるということが挙げられる。また、「喜び」というポジティブな感情についての評価は肯定的なものとな一般的に捉えられており、「怒り」「悲しみ」というネガティブな感情については逆に、どのように捉えるかは個人差があるものと考えられる。このことからポジティブな感情についてはその評価について共感しやすいが、ネガティブな感情については評価がばらつくため、共感し難いという現象が起り得ると推測される。心理療法においては共感ということが大切にされるが、ネガティブな感情については特に、セラピストはクライアントの感情につながっていくのが難しいと感じられる側面があるかもしれない。

次に「怒り」への評価尺度を因子分析したところ、嫌悪感、不純感、必要性因子が抽出されたが、これは先行研究（奥村，2008）と異なるものであった。先行研究では「負担感」に含まれた、「怒りを感じるのが嫌いだ」「怒りを感じることに對して、きついとを感じる」といった怒りを感じることに負担に関する一部の項目が、「怒りを感じることに罪悪感を感じる」といった「他者懸念」の因子に混ざるかたちとなった。本研究では怒りに関する「嫌悪感」が、より他者の存在を想定した上での怒りに對する嫌悪であり、それとは別に怒りというものは弱い、悪いことであるという、自身の内的な評価に基づく怒りに對する「不純感」が抽出されたといえよう。とはいえ嫌悪感因子と不純感因子に比較的強い正の相関がみられたことから、對他者と對自己の怒りへの否定的な評価というのは、相互に強めるものであると考えられる。また必要性因子と不純感因子に比

較的強い負の相関がみられたことから、自他に対して怒りを否定的なものと評価していると、怒りというもの自分が自分にとって必要なものであるという評価は薄れていくと考えられる。心理療法では怒りの感情を深めていくと、実はそれが自分というものを考えていく上で必要な感情であったと気づくことがある。つまり怒りというのはネガティブな要素だけではないのである。そこで怒りへのネガティブな評価が怒りの必要性を薄めるという本研究の結果をふまえると、怒りをネガティブなものと考えがちクライアントに対して、セラピストが怒りという感情を大切な心の表現として扱っていくことが重要であるということが、さらに立証されたといえよう。

また「悲しみ」への評価尺度の因子分析結果は先行研究と多少項目は異なったものの、他者懸念・必要性・負担感の3因子が抽出された。「怒り」と因子構造は異なるが、どちらも「必要性」が共通し、それ以外の2因子はネガティブな評価であることが共通する。怒りや悲しみというのはネガティブな意味合いをもち、それゆえにない方が望ましいと認識されそうであるが、感情の研究者や心理臨床に携わる者のみならず、一般的にこれらの感情にも必要性が認識されていることは大変興味深い。

さらに悲しみへの評価尺度からは他者懸念因子と必要性因子に比較的弱い負の相関、他者懸念と負担感に比較的強い正の相関がみられた。つまり悲しみという感情に対して他者懸念を感じていると、悲しみに対してより強く負担感を感じ、必要性が感じられなくなるということであると考えられる。心理療法において、セラピストはクライアントが自由に心の内を表現できるような関係性と雰囲気をつくることが求められているが、悲しみにおいては特に表出において他者懸念を感じないような配慮が必要であることが、本研究のこの結果から言えるだろう。

### 4.3 感情特性と情動への評価の関連性について

感情特性によって分けられたポジティブ特性群、ネガティブ特性群とで情動への評価を比較したところ、「悲しみ」への評価の「他者懸念」因子のみ、ネガティブ特性群がポジティブ特性群より得点が高いという結果が得られた。つまりポジティブ特性の人はネガティブ特性の人に比べて、悲しみを覚えることに情けなさや恥ずかしさを感じないということである。また「悲しみ」についての必要性と負担感、「怒り」への評価についてはポジティブ・ネガティブ特性群で有意差はみられなかった。

このような結果となった一因としては、特性一致効果 (Derry PA & Kuiper NA, 1981) が考えられる。特性一致効果とは、個人の安定した感情特性と一致した感情値をもつ情報が選択的に処理される現象である (池上・五十嵐, 2010)。この理論に則ればポジティブ特性群はポジティブ感情特性の影響を受け、悲しみへの他者懸念評価が肯定的になり、逆にネガティブ特性群は否定的になったのではないかと考えられる。そしてこの特性一致効果とは全ての感情においていえるのではなく、本研究でいえば悲しみの他者懸念という、一部の感情にのみ適用できるものなのかもしれない。この点についてはさらに厳密な検討が必要である。

## 5. 総合考察とまとめ

本研究では感情特性と情動への評価にどのような関連性があるかを、質問紙法によって検討することが目的であった。その結果、まず感情特性についてはポジティブ感情が感情特性を弁別するものでない、特性間で共有される感情であることがわかった。さらによりネガティブな感情を感じやすいネガティブ群と、よりネガティブな感情を感じにくいポジティブ群とで「怒り」と「悲しみ」への評価を検討したところ、悲しみの他者懸念のみ、ネガティブ群がより感じやすいという結果が得られた。わずか2つの情動での検討であるが、感情特性と情動への評価というのは「問題」で想定したように、1対1対応するような単純なものではないと考えられる。さらに本研究の結果を総合すると、ポジティブ感情、怒り、悲しみの順に特性の違いが強くなる、つまり特性の違いを反映しやすく、他者と共有されにくいということが考えられる。このことは心理療法において、クライアントの悲しみがセラピストに共有しにくいということがあっても、クライアントの個性を反映するものとして大切にすることが重要であることを示唆するものであろう。

ところでいわゆる冠婚葬祭、つまり社会的な儀式というものをみると、ポジティブな感情や怒りを扱う儀式よりも、悲しみを扱う儀式のほうがはるかに多く、また出席者も多いと考えられる。これは「悲しみ」は他者間で共有されにくい感情であるため、儀式という社会的な装置によって共有し、悲しみを乗り越えていこうという意味があるのではないか。

今後はさらに感情特性と情動への評価について研究法を精緻化して検討し、感情のもつ臨床心理学的な意味について検討を重ねたい。

注1) 本論文では「情動」と「感情」の区別が研究者間で様々である(今田, 1999)という指摘から、両者をほぼ同義語として扱う。引用文献においては、元の表記のままとした。

〈付記〉この論文は、筆者の一人である藤井が平成23年度聖泉大学人間学部卒業論文として提出した「感情特性と感情状態が情動への評価に及ぼす影響について」の一部を、藤井と谷口が加筆修正したものである。

## 文 献

- Campos JJ, Campos RG & Barrett KC (1989) : Emergent themes in emotional development and emotion regulation. *Developmental Psychology*, 25 , 394-402.
- Damasio AR (1994) : "Descartes" error : Emotion, reason, and the human brain. G.P. Putnam's Sons.
- Derry PA & Kuiper NA (1981) : Schematic processing and self-reference in clinical depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 90 , 286-297.
- 今田純男 (1999) : 感情 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁桝算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 有斐閣 141-142.

- 池上貴美子・五十嵐早貴（2010）：自己関連語を用いた気分一致効果に関する自尊感情の検討  
金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, 2, 1-104.
- 伊藤美加（2000）：気分一致効果を巡る諸問題—気分状態と感情特性— 心理学評論, 43（3）,  
368-386.
- Izard CE, Libero DZ, Putnam P & Haynes OM（1993）： Stability of emotion experiences  
and their relations to traits of personality. *Journal of Personality and Social Psychology* 84  
847-860.
- Jung CG（1934）：CW8 253.
- 加藤由樹・加藤尚吾・杉村和枝・赤堀侃司（2008）：テキストコミュニケーションにおける受信  
者の感情面に及ぼす感情特性の影響—電子メールを用いた実験による検討— 日本教育工学会論  
文誌, 31（4）, 403-414.
- 樫村正美・福森崇貴（2010）：アレキシサイミアからみた「感情無視」に関する利益・コスト  
認識効果の検討— 感情心理学研究, 17（3）, 210.
- Malatesta CZ & Wilson A（1988）： Emotion cognition interaction in personality development :  
A discrete emotions, functionalist analysis. *British Journal of Social Psychology*, 27, 91-112.
- 奥村弥生（2008）：情動への評価と情動認識困難・言語化困難との関連— 教育心理学研究, 56,  
403-413.
- 奥村弥生（2010）：「情動への評価」研究の展望：概念、情動過程での位置づけ、その形成につ  
いて— 九州大学心理学研究, 11, 109-118
- 坂上裕子（1999）：感情に関する認知の個人差— 教育心理学研究, 47（4）, 411-420.
- 坂上裕子・菅沼真樹（2001）：愛着と情動制御—対人様式としての愛着と個別情動に対する意識  
的態度との関連— 教育心理学研究, 49, 156-166.
- Watson D & Clark LA（1994）：How are emotions distinguished from mood, temperament,  
and other related affective constructs, In Ekman P and Davidson RJ (Eds.) *The Nature of  
Emotion*. Oxford University Press 89-93.
- 余語真夫（2007）：感情と健康— 鈴木直人（編）朝倉心理学講座10— 感情心理学— 68-87.